

第2回8020童話賞

児童生徒の部 「最優秀賞」作品

「ムシバ三兄弟」

小学 5年生

すこし前のお話です。ある男の子の口の中に、グーと、チョコキと、パーの、むし歯菌の三兄弟が住んでいました。

三匹が住んでいた男の子は、歯みがきをよくしないで、おかしばかり食べる男の子だったので、三匹はとてもいいこちの良い住みかでした。それに、おかしを食べかすや、さとうが、歯にいっぱいついていたので、三匹はむし歯を何日もかかって作り上げ、その上を、とんだりはねたりしてみました。すると、男の子は、

「うえーん。歯がいたいよー。おかーさん、いたいよー」

と言って、なみだを流しながら、とてもおかしい顔で泣くのです。そのたびにこのどが、

「ヒック、ヒック」

と大きな音を立てます。

三匹は、それがおもしろくっておもしろくってたまりません。

「変な音ー」

「おもしろい顔ー」

「アッハハハハ」

その次、男の子は歯医者さんに行きます。

まだこのときも、けっさくなのです。

「うえーん。歯医者さんに行きたくなー」と男の子が言つと、お母さんが

「がまんしなさい。歯医者さんに行かなさーよ、むし歯がなおりませんよ」

「でも行きたくないよー」

口の中では三匹が、おなかをかかえて、笑っていました。

「うえーん。だつてー」

「どーせむし歯がなおっても、歯みがきせず、おかしばかり食べる」決まってるよ」

「そうだよ。そうに決まってるよ」

「アッハッハッハッハ」

三匹の思ったとおり、むし歯がなおったその日から、男の子はおかしを食べ始めました。そして、歯みがきまっはりしませんでした。

「ほーら、ぼくの言ったとおりのー」

チョコキが得意そうに言いました。

それから、何日かたった日、三匹に強敵が現れました。

それは「はみがき粉」でした。

歯みがきを、全然していなかった男の子も、はみがき粉の減り具合で、お母さんに歯みがきをしていないことが、ばれてしまうことに気付いて、毎日歯みがきをしました。

その間、三匹は、歯の根元の、小さなすきまにもべりこんで、歯みがきが終わるのを、じーっと待たなければなりませんでした。

ところがある日、パーが、男の子の歯ブラシで、外にかき出されてしまいました。

「パーー！」

グーと、チョコキが、助けに行きました。その時、水が流れこんできました。

このままだと口の外に出されてしまいます。

三匹は、歯と歯をつたって、外に出られないようにと、願いながら、もっと安全な、深いすきまをさがしました。

「どこにあるんだ」

「あっ、ここに深そうなすきまがあるよ」

「よし、飛びこもう。それっ」

それと同時に、男の子が水をはき出しました。

「ウワー」

「ウー」

三匹は、なんとかもちこたえて、助かることができました。

その夜、パーが言い出しました。

「このままここにいたら、水とっしょに、」

どこかへ流されてしまうよ」

「そうだなあ」

グーが考えます。

「そうだ」

チョキが言いました。

「あのね、他の人の口の中に行けばいいんだよ。他の人が口をあけたときに、思いっきりジャンプして飛び込むんだ」

「できるかなあ」

「きっとできるぞ」

「明日、男の子は学校に行くから、給食のときに飛び込むんだ」

「がんばろう。エイ、エイ、オー」

次の日の、給食の時間に、計画は決行されました。標的は男の子のとなりの、いかにも歯みがきをしなげそうな女の子に決まりました。

のどの近くまで行って、三匹は女の子の口が正面をむいたとき、いっせいに走り出て、カいっばいジャンプしました。

「エイー」

自分たちでもびっくすめへららいジャンプして、見事、女の子の中に、飛び込みました。

「ヤッター。ぼくたちが力を合わせれば、こんなことは楽勝ぞ」

「アッハッハッハッハー」

その後も、三匹は歯みがきをしない子の口を飛び回って、むし歯を作り続けています。

今、もしかしたら、みんなの口の中に、

「アッハッハッハッハー」

と笑っている、三兄弟がいるかもしれないせ

ん。

むし歯にさねないうちに、歯みがきをしておいたほうが、いいですよ

「アッハッハッハッハー」